慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 鈴木正崇編『森羅万象のささやき : 民俗宗教研究の諸相』風響社、2015年
Sub Title	
Author	佐川, 徹(Sagawa, Toru)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.121- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：鈴木正崇編

『森羅万象のささやき―民俗宗教研究の諸相』風響社、2015 年

佐川　徹

本書は、1986 年に慶應義塾大学へ着任した鈴木正崇が、2015 年 3 月に同塾を定年退職するのに際して、鈴木研究会 OB らの呼びかけにより企画・刊行された論文集である。全 3 部 42 本の論文から構成された、998 頁を数えるじつに浩瀚な書物である。論文集を紹介する際の定石は、まず各章の著者名と論文名を記すことだが、残念ながら本稿ではそれができない。目次の掲載だけで、本稿に許された紙幅のおおよそ半分にあたる 1500 字を越えてしまうからである。以下には本書の部構成だけを記そう。

第 1 部「海外編」は地域ごとに区分されており、「南アジア」（収録論文数は 6 本。以下同じ）、「東南アジア」（3 本）、「東アジア」（3 本）、「中南米」（3 本）、「アフリカ」（3 本）から成る。第 2 部「日本編」はテーマごとに区分されており、「神と仏」（5 本）、「巡礼と講」（5 本）、「祭礼と風流」（3 本）、「民俗芸能」（3 本）、「沖縄」（2 本）から成る。第 3 部は「理論と実践」で 6 本の論文から成る。

「退職記念論文集」は、広範な内容を包含したものになりやすい性質を有しているが、本書はその中においても対象とされた地域の広大さと取りあげられたテーマの幅広さにおいて際立っている。この特徴は鈴木自身の研究内容の多様性を反映している。本書の巻末には鈴木の研究業績が 40 頁以上にわたり記されている。各論のタイトルに目を向けると、日本の各都道府県にくわえて、スリランカ、インド、中国、バリ、トーゴといった場所が、また宗教や世界観に関わるものを中心としながらも、親族やジェンダーから芸能や観光にまでいたる広範なテーマが記されている。圧倒的な行動力と衰えることのない知的好奇心、そして学問領域間の窮屈な分業体制に捉われることのない境界横断的な思考から生みだされた、驚異的な広がりをもつ業績群である。

本書に収録された論文の内容を大まかに整理してみよう。まず目につくのは、社会／文化人類学や民俗学の伝統的なテーマ、つまり親族関係（外川論文）や民間信仰（宮坂論文、床呂論文）、神話や説話（鈴木論文、エレーナ論文）、儀礼の過程（澁谷論文、梅屋論文、市田論文）、祭祀文化（高橋論文、阿南論文）、世界観（浅川論文）、浄・不浄観（谷部論文）などをめぐる手堅い記述がなされた論文である。なかでも、静岡県における盆行事の商品化の過程をまとめた山田論文や、大分県にくらす漁民の親族観への生命科学的な知識の影響に言及した厚論文は、日本の地域社会の慣習や世界観が、比較的近い過去に決定的な変容を遂げていたことを記録する「今しかできない」重要な仕事だ。また、スイスにおけるチベット仏教の受容を多文化主義

佐川徹「書評：鈴木正崇編『森羅万象のささやき―民俗宗教研究の諸相』」
『三田社会学』第 21 号（2016 年 7 月）121-123 頁

が内包する問題との関係で分析した久保田論文や、台湾に日本語で礼拝がなされる教会が成立した歴史的過程を紐解いた藤野論文は、宗教と政治との一筋縄ではいかない関係のあり様を示した刺激的な事例研究である。やや異色なのは、見世物小屋ヤブ（お化け屋敷）における「オドカし」の所作を主題とした門伝論文だが、実践コミュニティ論としても読めて抜群に面白い。

多くの「体験修行者」を受けいれている福岡県篠栗新四国霊場や（シャールロット論文）、聖地巡拝観光を推進する沖縄県南城市（塩月論文）の分析など、寺社や祭祀、民俗芸能の観光化に焦点を当てた論文からは、現代世界において「宗教的なもの」が多様な存在をつなぐ結節点として浮上している様子が伝わってくる。原論文や中山論文は、参拝や巡礼の経験が主体にもたらす作用を原理的に探究しているが、その考察結果が現代の多様な「参拝者」や「巡礼者」にも適用しうるのかという点に興味がわく。観光化は地域社会を活性化するポジティヴな側面ばかりが強調されがちだが、広島県で観光神楽に携わる人たち自身が、神楽の「本物性／偽物性」について評価する様子を記した川野論文からは、ホスト社会側の複雑な心情が垣間見える。もっとも、聖地の観光化が近年に始まった現象ではないことは、昭和初期の時点で修験集団が「地域活性化」に中心的な役割を果たしていた鳥海山の事例や（筒井論文）、近世における伊勢参拝の大衆化にともない増大した「行き倒れ人」への処置を論じた濱千代論文から、うかがいしることができる。

親族組織や信仰体系に埋めこまれた差別意識やジェンダー規範の現代的な展開についても、複数の論文で主題化されている。宮下論文は、沖縄において「男女平等」の理念は受容されているにもかかわらず、位牌継承をめぐっては男性中心主義がしぶとく保持されていることを喝破し、中野麻衣子論文は、バリ社会においてカーストは有名無実化しているものの、浄・不浄観念それ自体は外部者からは不可視化された領域で再生産されていることを解きあかす。とりわけ独創的な成果は、インドの舞踊界で既存のジェンダー観を部分的に組みかえながら活躍する男性ダンサーの実像に迫った古賀論文だろう。

集団のアイデンティティ形成を取り扱った論文では、高田論文や陶論文が婚姻や宗教に注目しながら集団間の境界の動態を手際よく分析している。ドーア論文では、米国人学生がシエラレオネ訪問時に用いた消毒液というユニークなモノに注目しながら、他者性の構築過程が示される。インドやグアテマラにくらす女性たちの装いの持続と変容を丹念にたどり、衣装が人びとの「われわれ意識」に中核的な役割を果たしていることを記した脇田論文と本谷論文の記述は印象的だ。くわえて、メキシコの先住民によるインターネットをとおした情報発信（禪野論文）やブラジルのストリート・アート（中野紀和論文）、ベナンの市民によるラジオ番組への参加（田中論文）を主題とした論文は、非西洋諸国の都市部において広い意味での「公共圏」が生成している現場を捉えた論文として、貴重である。

以上にまとめた諸論文は、いずれも民族誌／民俗誌的記述の充実を第一に置いた内容となっているが、おもに第三部「理論と実践」におさめられた諸論文では、既存の研究への鋭い批判や、新たな研究領域や実践に向かうための理論的な準備作業がなされている。つまり、親族研

究の近年の興隆を整理した仲川論文、修験道を民俗宗教と捉えることへの疑義を「地方から」大胆に表明した白川論文、ヴィゴツキー心理学に拠りながら民俗における感情の問題を主題化するための理論的探索を進めた中西論文、鈴木のスリランカ研究に刺激を受けながら書かれた、日本仏教研究の革新に向けた力強いマニフェストである碧海論文、鈴木のいう「自然と人間の共生感覚」へ接近するためのより自由な「トーテム操作媒体」概念のあり方を論じた織田論文、そして人類学の「異文化交流」の必要性をみずからの医療人類学教育の経験から誠実に説いた濱論文である。

広範な内容を含む「退職記念論文集」は、「まとまりのなさ」を感じさせるものになりやすいが、本書もその例外ではない。収録論文の多くは、鈴木という結節点がなければ一書に綴じられることはなかったであろう。だが、この「まとまりのなさ」こそが、本書を人類学が本来もっている魅力を体現した読み物にしているともいえよう。各人がそれぞれのフィールドで体得してきた「森羅万象のささやき」を披露しあい、多彩な事実をともに面白がりながら、各人が自己のフィールド経験をより広い視座のもとで文脈化していくことができる、その魅力のことである。学問の細分化にともない、今日出版される論文集の多くは調査地域や専門分野を同じくする研究者の論考のみによって構成されている。もちろん、対象を限定することでわかることはたくさんあるのだが、その限定が書き手と読み手の双方を視野狭窄に陥らせかねない効果をもつことに、私たちはもっと敏感になったほうがいいのだろう。地に足のついた、しかし単一のフィールド経験だけに閉じこもるのではない開かれた「ものの見方」を醸成するためには、本書のような著作をつうじてまずは国内外の微細な民族誌／民俗誌的事実のシャワーを浴び、人間が紡ぎだしてきた実践と想像力の幅に思いをいたらせる必要があるはずである。

本書の末尾を飾る鈴木による「アニミズムの地平―岩田慶治の方法を越えて」は、その一文一文に著者の「ものの見方」が濃縮されているであろう、含蓄に富んだ小論だ。評者は、「人間と非人間を対称的な存在として捉える」ことを目論む近年の人類学理論の最先端に飛びつくまえに、岩田慶治など日本の人類学者がフィールドとの長い対話の末にたどり着いた思想的到達点を受けとめることの大切さを、思いしらされた。また、1980 年代以降の人類学において主流となった「全体論の終焉」をめぐる議論に頭で納得してしまうまえに、ホームとフィールドとの往復運動を続ける覚悟が自分にどれほどあるのかを省みる必要があることも痛感した。複数のフィールドへ 30 年近くにわたり通い、変容する地域社会に寄り添い続けてきた鈴木による「地域研究の面白さは全体を一挙に把握する地平に立つことである」（924 頁）ということばを、読んでのことである。

「フィールドワークは人生そのものである」（925 頁）と記す編者の研究者人生にとって、大学からの退職はただ一つの通過点に過ぎないのかもしれない。編者の今後ますますのご活躍を祈念して本評を閉じたい。

（さがわ　とおる　慶應義塾大学文学部）